

その人がいるだけで、
場は、すでに整っている。

何も指示していない。
何も語っていない。

それでも、
場に余計な音が入らなくなる。

それは、権威ではない。
支配でも、統率でもない。

場を仕切る力や、
空気を読む技術の話でもない。

カリスマ性や、
影響力という言葉でも足りない。

それらはすべて、
秩序が生まれたあとに与えられる名前だ。

場が整うとき、
人は何かを足していない。

むしろ、
余計なものが入り込めなくなっている。

言葉を増やさない。
意味を押しつけない。
感情を振りまかない。

ただ、
自分の位置を引き受け、
距離を乱さず、
重心を内に戻し、
去ったあとに何も残さない。

その人が、
場に対して、何も要求していないとき、
場は、勝手に整いはじめる。

秩序は、作られない。
静けさも、命令されない。

場が整うのは、
誰かが「在り方」を
最後まで引き受けているからだ。

その人がいるあいだ、
場は、安心して動かなくていい。

だから、
人は自然と声を落とし、
動きを減らし、
余計なことをしなくなる。

場は、人によって支配されるのではない。
人によって、解放される。

場は、
整えられたのではなく、
預けられていた。

Edition — 存在の芯
別景：場

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026